
心象 ~ A Book of Poetry ~

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心象 A Book of Poetry

【Nコード】

N5985G

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

誰でも一度はするような、ありふれたことをしてみようと思う。

***実験的作品です。作中に登場する文章には引用文が含まれています。

P r e f a c e

波打ちぎわに砂の城をつくるようなあやうさで、言葉をつみあげてみる。

人はそれを、戯れごとと呼ぶのかもしれない。

生きていくその根幹には関わりのない、どうでもいいこと。それでいて、誰もが一度はしたような。

陳腐で平凡でありふれたことを、僕もまた、してみようと思う。誰もが口にするような言葉を、紡いでみようと思う。

それは、単なる戯れごとにししか見えないだろう。

読むのにかかる時間もしているような、短い文字の羅列だ。そこに意味は無いのかもしれない。

僕の世界は僕だけで閉じて。

書き連ねた言の葉は、誰にも届かないのかもしれない。

それでも。

これまでに数多の人々がそうしてきたように。

僕もまた、言葉を紡いでみよう。

それがどんなに未熟でも。

誰の心に届かなくても。

書くために、書いてみよう。

No Where .

あなたはきっと

僕のことをわからないでしょう

道ですれちがっても

同じベンチに座っても

僕を僕だと判らないまま

通りすぎるだけでしょう

それでいいのです

あなたが僕を知らないように

僕もあなたを知らないのだから

これはそんな出会いです

ここはそんな場所なのです

白い画面のこちらがわで

僕は言葉をおくりだし

あなたがそれを受け取るのです

その逆もまたしかり

あなたが言葉をおくりだし

僕がそれを受け取るのです

これはそんなふれあいです

ここはそんな場所なのです

紡ぐ文字がすべてだから

存在さえも曖昧になる

無音声の世界だから
響く嘘が愛おしい

ありったけの嘘をおくりましょう
くもり一つない真実に見せかけて
ありったけの真実をおくりましょう
ごまかしだらけの嘘に見せかけて

これはそんな騙しあいです
ここはそんな場所なのです

そんな場所といいつづけるのも
そろそろ飽いてまいりました
ここはどこでもない場所です
ここはどこでもある場所です
そんな馬鹿なと思いますでしょう
納得なさなくて結構です
どこにもなくてどこかにある
そんな場所だと思っただければ
どこかにあつてどこにもない
そんな場所だとあきらめてくだされば

ここはそんな場所なのです
特別なことなどひとつもなく
ありふれたことなどひとつもない
毒にも薬にもならないような言葉を
僕が紡いでいるだけの
在りながら無い場所なのです

一つだけ本当をさしあげましょう

僕はただ

できるかぎり誠実に

できるかぎり対等に

人を見つめてみたいのです

嘘を重ねてみたいのです

どこでもないここならば

それができようかと思うのです

どこにもないここだから

そうしてみようと思ったのです

あなたは僕をわからないでしょう

それはそれでかまいません

僕もあなたをわからないのですから

それはそれで公平というものです

ですがもう一つだけ

あなたにお伝えしたいことができました

ようこそおいでくださいました

どこでもないこの場所へ

Life gose on .

空が青い。

ちっぽけな窓越しに、四角く切りとられた世界。
この荒れっぱなしの部屋を片づけねえと。
それ、思いついてからどんだけたったよ？

空が青い。

昨日の雨が嘘みてえ。

とりあえず、おにぎりをむさぼる。

特に感慨もなく、一合分が腹に消えた。

食い過ぎだろ、俺。

空が青い。

旧型のCDラジカセが、かすれた声で唄う。

古いカセットテープは、もつれることもなく動いて。

たまにDJの声が響く。

何を思って録音したんだっけ、思い出せねえや。

空が青い。

酷い惨状だなしかし。

洗濯物は干しっぱなし。

ノートは山積み。

どこから手えつけたらいいんだ、これ？

空が青い。

ためこむだけ溜めこんだガラクタがめんどい。

舌ったらずなDJの声が、いつそ心地いい。

そっうえば、テープは100本を超えてんだっけ。

嫌がらせか。

空が青い。

聴くともなく聴いてたテープが、曲の途中で切れた。
てめえ最悪か？

眩きながらB面をかける。

『幸せについて本気出して考えてみた』。

断定してやる。てめえ最悪だ。

空が青い。

よく考えたら、ここ数日使ってたのは一メートル平方だ。
なんだそれ。バカだろ。

空が青い。

自分のリクエストとメッセージまで出てきた。
バカだ。昔も今も大バカだ。

空が青い。

平穏だ。バカバカしいくれえには。

今日はもう、部屋を片付ける日にしよう。

今決めた。って今更か。

空が青い。

あつてもなくてもいいモンをどうすんのか、
それが今一番の悩みとか。

なんて、なんて幸せで馬鹿げた日だよ。

ああ、空が青い。

M e r m a i d .

知っているでしょう

あちらがどれほど危険な場所か
だから 行くのはおよしなさい

引きとめる優しい声に

ごめんなさいも言えなかった
どうしても逢いたかったから

14 になった誕生日

くるりくるりと潮が遊び
海にもぐった風がめぐる
そんな嵐の夜だった

大きな船が巻き込まれて
木切れや人や色とりどりの石たちが
あたりいちめん舞っていた
きらりひらりきらひらり
ひらりきらりひらきらり

珍しくはないことだった
それなのにどうしてかしら

わたしはあの人を見つけてしまったの

金色の髪 青白い頬

気のせいだったのかしら

紅い唇のほほえみが

きらきら光る石よりよほど
彩られて美しかった

沈めてしまえばよかったわ
石のように時をとめて
いいえ　いいえ
沈めないでよかったの
あの唇が青ざめてしまう

あの人は水よりずっと重かった
空気のあるところへ導くのは
思うよりずっと難しかった
けれど　ほら　あの砂浜で
あの人はほほえんでくれたの
それだけでしあわせだった

しあわせだったと思ったのに
ねえ　どちらが
ただしかったのかしら

知っているでしょう
こちらがどれほど安全な場所か
だから　行くのはおよしなさい

引きとめる優しい声に
さようならも言わなかった
どうしても逢いたかったから

15になった誕生日
海の果ての魔女のいおり

ぴたりと潮が止まる場所で
私は足を手に入れた
あの人に逢えるのならば
声なんていらなかった
ええ そうだわ
いらない と思ったの
そんなわけ なかったのに

流れついた砂浜で
わたしはあの人に拾われた
立つだけで足は痛むけれど
そんなことはどうでもよかった
あの嵐の夜のことを
あの人は覚えていないけれど
私がおどるその姿で
あの人がほえんでくれるなら
世界は何より美しかった

知っているでしょう
あなたの時間は限られている
だからどうか 戻ってきて

海の中から響く声に
返す言葉をもたなかった
あの人のそばにいたかったから

16 になった誕生日
陸のはしにつながれた

大きな大きな船の上で
舞踏会がひらかれた
くるりくるりとわたしはおどる
石のように重い足に
終わる日の近さを知る
だから わたしは笑ってみせた
できるかぎりの想いをこめて
できるかぎりの優雅さで
ひらりひらりとおどってみせた

船の上のあの人は
海の中より遠くかすんで
知らない誰かと歩いていた
そうしてあの微笑みをくれた

愛する人を見つけました
祝福していただけますか

声があればいいのに
心の底で叫びながら
わたしはにっこり笑って見せた
声がなくてよかったの
だって あの人が微笑んでくれる

知っているでしょう
こちらに戻る方法を
だから この短剣をお使いなさい

その日の夜のことだった
陸の端につながれた
大きな船の片隅で
私は短剣を受けとった
鈍く光る銀色のつるぎ
これであの人の胸を刺すの
ただそれだけのことが
わたしを人魚に戻すのだから

夜明け前の寝室で
わたしは刃をあの人に向ける
眠り薬が効いたのか
気配にさといあの人も
今はまだ夢のなか
振り上げた刃の先で
あの人はいつものように微笑んだ

知っているでしょう
人と人魚は相容れない
だから その短剣をお使いなさい

悲鳴のような優しい声に
ごめんなさいも言えなかった
わたしの声は ここにはない

陽がのぼる少し前
とぎれることなく続く海原は
あの人の微笑みのように美しい

どうすればいいのかしら

問いかけながらわかつていた
沈めてしまえなかったあの時に
望みはもう 決まっていたの

王子さま

王子さま

あなたがいらつしやる世界は
こんなにも美しい

あなたがほえむ世界は
とびっきりの光のよう

だから どうか

どうか おしあわせに

M e r m a i d ・ (後書き)

そうして

彼女は海にとけた。

A f t e r t h a t s t o r y .

『そうして彼女は、海にとけた』

パタン。

本を閉じる音が、やけに大きく響いた。

とりあえず、と。手近な枕の上に、青い表紙の短編集をそつと置く。

それから、大きく背のびをした。

ついでに首を回せば、骨が鳴る音が聞こえる。

ふと目をやった時計は、夜明けの近さを示していて。

気づいたとたんに空腹を訴えてくる腹に、苦笑いがこぼれた。

「何か、作んねーと」

独り言は一人暮らしの必須アイテムだ。

そんなことを行っただのは誰だっけ？

くだらないことを考えながら立ち上がる。

腰と背中が異様なくらい軋む。

晩メシ食ってからずっと座りっぱなしだったんだから仕方ねーけど。

マジ勘弁、と屈伸を一つして、僕はカーテンを開けた。

蛍光灯に慣れていた目が痛む。

そんなことはどうでもよかった。

できすぎだろう、と思う。

窓ガラスの向こうは、見たこともないような色に覆われていた。

黒、にはほど遠い藍色から紺碧、群青、淡青をへて限りなく透明

に近い青色へ。

世界一の画家がどれだけ精緻な技法を駆使しても、かなわないだろう姿だ。

夜明けとの狭間で立ちすくむように瞬く明星が、月のない天球にかすかに光る。

はるかかすむ山の向こうからは薄紅色の雲がたなびき、夜と朝の隙間をあでやかに照らし出している。

物語の中の彼女も、こんな空を見たんだろうか。

希望なんて何一つないような、あの状況で。

重い足をひきずるように船の縁によりかかって、それでもこんな空を見ただろうか。

そうだとしたら。それはどれほどの救いだったろうか、と僕は思ってた。

しばらくぼうつとたちつくしたまま、陽がのぼる姿を見つめていた。

窓からさしこむ光が、フローリングの床をこえて、枕のうえに置いたままの本にも届く。

徹夜までして読まねばならないものではなかった。

それはあくまで空言で、僕の日常には関係ない代物だ。にもかかわらず。

この、息をのまずにはいられない極彩色の世界が、彼女が願ったそのよう。

僕は認めずにはいられなかった。

ああそうだ。

世界はこんなにも、美しい。

Flower .

自転車で駆けぬける朝

薄衣のような緑にまじって
華奢な體の薄紅色が
自らを誇るように艶やかに
どこまでも無垢に咲っていた

透ける陽ざしのそのしたの
芽吹く前の裸樹の隣で
まだ枯れてはいないのよ
と叫ぶがごとく
独りきりの胸をはる

一瞬の光景はすでに遠く
僕は北風に背筋を丸め
おざなりにペダルをこいだ
相変わらず、革靴が擦れて痛いし
スーツは風を通して寒い
いらつくようなざらつくような
どうしようもない気分が近い

ああそうかと僕は思う
この苦しさは たぶん
あの凜としたたたずまいに
崇敬の念を抱いたからだ

世界で最後の一輪になったとしても
あの薄紅の彼女ならば
胸をはることを止めないだろう
そんな確信に僕は笑う

こんな戯言など
すぐに忘れてしまっただろうか
それとも案外覚えているだろうか
どちらでもいいことだ
日常には何の関係もない

それでもきつと僕は
彼女が散ってしまった後も
視界の片隅に花咲みを想う

M o r t a l .

かのベストセラーが正しいとするならば、人は土から生まれたのだという。

数限りない事例を鑑みれば、この体もいつかは土に還るのだという。

我らは、白い塊だけ残して焼いてしまふのだが。

世界が土から生まれたとして。

その土から生まれた我らは、

土から麦を、稲を、ありとあらゆる命による恩恵を受けた。

土に育まれた木々で火をおこし。

器を、紙を、青銅を、鉄を、コンクリートを、アスファルトを・

ありとあらゆる全てを、人は土から創りあげた。

いいや。

創りあげたなどという表現はおこがましい。

我らは土から奪ったのだ。

もはや錆びついた言葉かもしれないが、我らは土に還らない。

石の箱におさめられて終わるだけだ。

鑑みるに、

奪うばかりで還さない、

つながりを求めながら、繋がるうとはしない存在。

それが我らに最も相応しい定義ではなからうか

だとするならば

この手は常に土とともにあった、なぞと誇るのも、滑稽なほど歪なことだ。

たとうならば、我らなぞよりよほど古くから、土はそこにありつづけ。

たとうならば、我らなぞいなくとも、土は続いていく。

気の遠くなるほどに長い歳月のわずかの一瞬に、我らは土から生まれる。

あまたのありふれた命のごとく。
それでいて。

我らは、あまたのありふれた命のような土への還り方を忘れていく。

にもかかわらず

ありふれたそれらのように、命を奪うのだから始末が悪い。
たとえばそう。大地を耕し、稲を植える。

泥の中で稲は育ち、いつか金色の稲穂が実る。

その命を刈り取って、我らは糊口をしのごうのだ。

それは、当たり前で、かけがえのない基礎。

だ、と脳が理解している。

なれば。なにゆえ我らは、

土に触れたこの手を忌みきらうというのか。

触れたところから感染するような

そんな致命的な病は、ここには無いというのに。

A n a s s a s s i n .

「君のことなど何ひとつ、僕は信じていなかった。そう言えば満足かい？」

涼やかな笑みとともに、彼は言い放つ。

毒入りの盃を、飲み干したその口で。

「今なら、まだ逃げられるよ。ララフローラ。

いや、アサシン・N・ブラッド殿とお呼びした方がいいのかな？」

興味がわいた。素性を見抜いた鋭さもさることながら、毒を盛られたことを知ってなお、相手を生かそうとする精神状態に。

「扉の向こうには衛兵がいる。逃走経路は窓をおすすめするよ。

ここは三階だが、君の苦にはならないだろう」

淡々と言葉を紡ぎ終えると、彼は赤い布張りの椅子に腰をかけ、黒檀の机の上で両腕を組んだ。毒が末端から体を侵しはじめたことを、他者に気づかせない優雅さで。

「少しは驚いてくれないか、流血を嫌う暗殺者殿。

君の素性を掴むのは骨が折れる仕事だったんだから」

感情のない双眸にかき消された苦笑が、誠実で凡庸な好青年の仮面の残骸をしらしめすように揺れる。潜入して半年もたった今になつてようやく、彼のひととなりに触れた気がした。もしかしたら、彼も似たようなことを考えているのかもしれない。

すべては、積み重ねられた嘘のたまもの。

貴族にとってメイドは人に値しない。単なる家具だ。気まぐれに手を出してくる彼の睦言など、はなから信じるに足らなかった。

だが。

ならばなぜ、わたしはこの場にいるのだろう。

日陰を歩いてきた暗殺者が、この陽光の下で彼に素顔をさらしている。仮面としての顔ではない、見たこともない女の姿に同様の片鱗すら見せない彼に、王位継承者の一人としての貫禄を垣間見た気がする。それもまた、知らなかった顔だ。

できることなら、彼の治世の元で歩んでみたかった。

そう思う程度には、惹かれていた。

そんなことを悟って、わたしは笑う。

餓にもならないだろう、自分を殺してゆく者の微笑など。

「ここは君のいるべき場所ではない」

沈黙の中に思い浮かぶ、他愛もない夢物語の連なりを断ち切ったのは彼の声だった。

よく手入れされた爪先がさし示す先は、貴族の館に相応しい精緻な木彫りで飾られた窓。

解毒の要求すらない投げやりさが、茶番の終りを示している。

「いきたまえ」

P r o s a i c - I

傲慢な私は

明日もあなたが笑っていると

思い込んでしまうのです

彩川千代『祈りよりも高く』

届かなくなる前に

伝えておきたい言葉がある

久保幸太郎『0と1の狭間で』

すべて人は、いかなる場所においても、

法の下において、人として認められる権利を有する。

『世界人権宣言』

それでも、僕らは

手をつないで、生きていく

日不見あり『No name』

「私」は

「私のもの」の上になりたっている

その「私のもの」があてにならないから
いつも「私」は フラフラしている。

『駅前の看板』

『うたいたいの？』
「唄うの」

『どうしても？』
「どうしても」

『死にたいの？』
「生きたいの」

そうしてウタリは、唄いだした。

亀井哲也『ウタリ ウタ』

六十億の中でただ一人の君が、
存在してゆく約束

朝生直樹『その名前』

やるべきことをやりなさい

高橋ハル『電話』

誰がエスカレーターなんだ？
俺がエスカレーターなんだ

伊瀬川実『抑揚のない殺人事件』

夢みたものは ひとつの愛

ねがったものは ひとつの幸福

それらはすべてここに ある と

立原道造『優しき歌』

二本足にしてまた四本足にしてまた三本足のもの、
その足が最も多きときに最も弱くなる者、
爾は何ものか

『スフィングスの謎かけ』

L i f e .

「ちゃんと生きたこともないのに、生きる意味なんて分かるわけないじゃない」

目がさめる瞬間に聴こえたのは、そんな言葉だった。
テレビつけっぱなしだった。

心の中で首をかしげたわたしの耳に、もうすこし低い声が届く。

「手厳しいね、シイナは」

かすかな苦笑とともに紡がれた青年の声に、聴いてはいけないものを盗み聞きしてしまっているような後ろめたさを覚えて、わたしはとりあえず目を開けた。

それから。

まっしろな視界に、びっくりしてとび起きた。

「さてさて、如何したものかな」

ここはどこなんだろう、とか思う間もなく響いた声は、さっきの声よりはずいぶん歳をとった……たとえばおじいさんが話すときのような調子をにじませている。

そのやわらかさにちよつとだけ安心して、すぐぐがっかりした。

まだ、終わらなかつたんだなあ、となんとなく思う。

それから、何が終わらなかつたのかが分からなくて、今度はほんとうに、自分の首をかしげた。

「K? 何だつて言うのよ」

その間にも、会話は続いているらしかった。

どこから聞こえるんだろう、と見回してみても、人の姿は見えない。

気づいたことといえば、見渡す限り真っ白だと思っていた空間のそこかしこに、本の山がタケノコのように高く高く積み上げられていることくらいだ。

どうやら眼鏡をかけわすれてしまっているらしいわたしの目では、タイトルを読み取ることすらできそうになかったけれど。

「見えぬのか？あの姿が。聴こえぬか？あの息遣いが」
「だから、何」

ざわめきのようなものが少しづつ大きくなるのを感じて、わたしは息を殺した。

いったいどこから聞こえるんだろう。
というか、ここはどこだろう。

「まって！何か聴こえる！！」

静まりこんだ空間に、一際高い声が響いた。

「・・・下だ」

低い、初めて聞く声が言った。

「ああ。今、吐息が響いた」
「然様。時の刻み手じゃ」

どこからともなくあがった声が次々に言葉を続ける。意味が全くと言っていいほど分からなかった。耳を澄ましてみても、吐息なん

か聞こえない。

「そこに、いるのかしら」

「ここに、いるのか」

「そうじゃ、ここにおる」

誰が、いると言うのだろう。だって、誰もいないのに。

「紅き流れを秘めしもの」

「すべてのはじまりと終わりをもつ」

「穏やかで激しく」

「健やかに病みゆく」

「輝きくすむ」

「あのいのちが」

視線を感じた体が、勝手に竦んだ。其の瞬間には、もう気づいていた。

視線も、声も。目の前に広がる本が発したもののなだということに。

「へ？」

この人の唐突さには慣れた気でいた。
でもさすがにこれは不意打ちでしょ？
なんの脈絡もないじゃない。

だって、オレが今やってんの、書類整理じゃん？
・・・いちお、雑用じゃないんだけどね、オレの仕事。

「だから、お前がこの仕事をやっている理由は何だ」

何だ、って言われても。ねえ？
プライベートじゃん。

まあ、四六時中張りついてるから、そんなのなにに等しい生活してるけどさ。

あ、でも

「あんたは？」

あゝ。答えたくないって顔だね、こりゃ。
だって眉間にシワよってる。

『冷徹な人形』って嘘でしょ実は。

その喋り方なんとかすれば、引く手あまたなのに。

「質問を質問で返すのか？」

ホラ。可愛いきりかえし。

ふだんやつてる腹芸どこいったの？

「プライベート、なんだけど。一応。」

でも、ま。

アンタの理由教えてくれるなら話しちゃっていい程度のことなんだけどね。

「J・B。ボディーガード暦12年。

そのうちS級要人警護が87%。任務達成率98%」

ああ、つとに。可愛くない。本当に可愛くない。

それも一応はトップシークレットなのに。

「だが、それだけだ。ジョンなのかジェイなのかジョゼフィンなのか、気になって仕方がない」

そこ！？　つか、ジョゼフィンは止めてくんないかなジョゼフィンは。

オレは男だから。

「・・・ここ二日ほどコンピューターにかかりきりだったのって」

そんな顔で頷くわけね、ここで。

ハッキングは犯罪だって。

しかもオレの個人情報だって。

学校で・・・行っていないから習ってるわけないか。

「だが、それ以上は軍の機密ファイルにすらなかった。お前は何者だ？」

ったくもう。しかたないなあ、この人は

「アンタが、自分のこと教えてくれるなら、教えてあげてもいいよ」

これが、最大限の譲歩。

任務終ったらオレの記憶だけ消しちゃうけどさ。

まあ、それまでなら別に知られてたってかまわないや。

「お前はズルイな」

今更？

そんなのはじめからだって。

オレはね、すつごくずるいんだよ。博士。

だから、知っててこんな質問をすることだってできちゃうんだ。

「ねえ。アンタは何で、こんなとこにいいの？ キルパトリック博士」

Voice .

よりよく生きなさい、と声が言う

どうして、と私が尋ねる

努力しなさい、と声が言う

どうして、と私が尋ねる

答えはまだ、返らない

目標を持ちなさい、と声が言う

どうやって、と私が尋ねる

努力しなさい、と声が言う

どうやって、と私が尋ねる

答えはまだ、返らない

努力しなさい、と声が言う

目標をもつて前向きに

よりよく生きなさい、と声が言う

焦って焦って闇雲に

手近な列車に駆け乗った

束の間の安心を手に入れて

……もう無くしてしまった

声が言った

努力しなさい

努力すれば、出来ますよ

ねえ どんな手順で？

努力の連鎖が続いていく
当たり前のことみたいに
誰もが必死に続けてゆく
理想形がどこかにあるみたいに

努力しなさい、と声が言う
それって何、と私が尋ねる
努力したよ、と私が言う
結果を見せろ、と声が言う

もういいよ投げ出してしまえ
縮こまって耳を塞いで
目を閉じて眠ってしよう
ホラ、これで……

……なんで、声が

現実を見なさい

……声が、言う
取り残されてる気分で

ヨロヨロと立ち上がる
行き先も見えぬまま

努力努力努力

意味も知らず積み重ね

巧く巧く巧く

要領よく装って

声、お前は何だ

問いかけを一つ、私が放つ

お前は何だ、と声が言う

なんてことだ

声はつまり、私だった

L i e .

世界はとても平和だ。

暴力に脅えない生を、誰もがまっとうできる。

安全な場所で目を覚ますことができるし、今日の食事について不安を感じることもない。

世界は、とても平和だ。

子どもたちは、生まれた瞬間に世界から祝福される。

生まれてきてくれて、ほんとうにありがとう。

一緒にしあわせになろうね。

ひかりに唄われて、子どもたちは約束する。

この人生を楽しむよ、と。

彼らは、おだやかに育つ。自分を他者を世界を愛し、同時に愛されて。

ひかりのなかで育つ。

そうしていつか大人になった彼らは、たすけあいながら世界を創る。

優しい世界だ。誰も誰かを傷つけなくていい、傷つけなくても生きていける世界だ。

苦しいことがないわけじゃない。

人は死ぬし、病気にもなる。

仕事をしてお金を稼ぐ必要があるし、勉強することも山のようにある。

もちろん、相性が合わない人だっている。

それでも、世界は平和で優しい。

誰もが覚えているからだ。楽しむよ、と約束した時のことを。

だから、苦しいことがあっても世界は優しい。

誰もがたった一つの事実で繋がっている。

昨日も今日も明日も、はるかなる未来でも、楽しんで生きていくという約束が、誰一人としておいていかない。

そこには、苦しみはあっても絶望はない。

毎日は希望に満ちていて、人は自分をそうするよう人に愛する。時に泣き、怒ることもあるけれど、その事実すら楽しんで生きてゆく。

病にあっても、年老いても、障害をもっても、願うように望むように、自分の思う自分を他の誰とも分かちあって支えあって生きてゆく。

いつか死ぬときも、彼らは楽しみながら笑って逝くのだ。

約束を果たしたことを誇りに思いながら。

I w a n t t o b e c o m e . . .

忘れてしまえたら いいと思う
これまでのこと 全てを
もういちど やりなおせたら
それでも間違えるだろうけれど
もう少し まともだろうか

正しいものを 探していた
道しるべが欲しかった
とりかえしのつかない方へ
僕は進んでしまうから
進んでしまった気がするから

がんばるのは嫌だった
がんばる人は苦手だった
それでは生きていけないと
言われたそばから逃げだした
カッコ悪いのは自分だった

平穏な毎日が好きだった
何の為か分からないことを
繰り返す意味を忘れる前は
ねえ 僕は持っていたの？
はじめから なかったの？

人の言葉が僕を責めた
人の言葉が僕を認めた
長い暇を埋めただけの僕を

買い被る声が響いた
あれ？ 僕は何だっけ

出来ないことはないよ と
漫画のセリフを吐いてみた
誰かのそばで笑いながら
どうしようもなく虚ろな僕
ねえ 薄っぺらい嘘を見抜いて？

限界なんてないよ と
優しい声が僕に言った
自分が頑張らないと と
厳しい声が 励ましてくれた
そうして僕は 途方に暮れた

何をすればいいの？
何処へゆけばいいの？
どうしたら どうすれば
いつそ 角でも生えていれば
全ての理由になるだろうに

いいご身分ね と声がした
何もしたくないと思うのは
眠ってしまえと思うのは
甘えなんだ と分かっている
意味も分からず終りを願った

はじめの一步を間違えた
生きてみたいと望んだのに
その瞬間に間違えていた

ねえ 一つ思うんだ

僕がいない世界は 綺麗だろうか

結局のところ単純なんだろうか

ひねくれてみせても

嘘をつくのは苦手だから

すぐにバレてしまえばいい

僕は 人間になりたかった

Lily Doly,

リリイ・ドリイが住んでいるのは、小さな白い家だ。

海に浮かぶ小さな島のまんかにちよこんと建っている。

白い家のほかには草原しかない島だ。

ドリイはいつも、草原のはしっこに座って、海と空を見ていた。

小さな家の小さなベッドに座って、小さな窓から眺めるより、その方がずっと楽しかった。

さびしい時、ドリイはいつも眼を閉じる。

たゆたう波音は、ドリイを見知らぬ場所に誘ってくれた。

水底の砂場、天空の花園、それからドキドキするような木の迷路。眼を閉じるだけのこの遊びが、ドリイはとても好きだった。

おだやかに、過ぎたことすら気づかせないような足取りの時が流れて、ドリイの髪は肩をこえた。

海が荒れることもなく、草が枯れることもなく。

変わらずにそこにある世界に、退屈ながらもドリイは満足していた。

そんなある夜。

珍しく、空に満月がかかっていて、ドリイはわくわくしながら海をみつめた。

何か、特別なことが起きる予感がした。

そうして、昇りきった満月の下で、海が静かに割れたのだった。

はじめて見る水底は、なんだか光輝いていた。

おそろおそろおろした足元で、シャラン、シャラン、と音がする。眼を閉じて聞いてみれば、それはドリイを呼ぶ声だった。

眼を閉じたまま、ドリイは歩いた。

白い家と緑の島が霞んで消えたことも知らないまま、ただただ真っ直ぐ。

そうして、次にドリイが眼を開けたとき、そこには世界がまっぴた。

H i t o r i .

くるくるしゃん、と少女が歩く
くるくるしゃん、と風が吹く

紅いおべべの袖の先で
回る小さな風車
くるくるしゃん　くるくるしゃん

くるくるしゃん、と少女が唄う
くるくるしゃん、と風が吹く

紅いおべべを見下ろして
空ゆく小さな鳥が啼く
くるくるしゃん、くるくるしゃん

くるくるしゃん、と少女が歩く
くるくるしゃん、と陽が暮れる

紅いおべべに弾む足
藪入り土産が背でおどる
くるくるしゃん　くるくるしゃん

くるくるしゃん、と少女が駆ける
くるくるしゃん、と荷がおどる

夜更けの道の闇の先
たたずむ家の戸が開く
くるくるしゃん　くるくるしゃん

眼を覚ました瞬間に、捕まってしまったことを思いだした。
同時に、薄く目を開いた。

どこぞのシティホテルの一室らしい。

ラボに連行するでもなく、こんな場所に連れ込んだヤツの意図が
理解できなかった。

ヤツが来てから、こんなことばかりだ。

当惑、と称するに相応しい感情が自分の中にもあるとは思っても
いなかったので貴重な成果なのかもしれないが。

益体もない方に持つて行きかけた思考を、本論に修正する。
連れ戻された。

しかも、手刀で意識を飛ばされるなどという原始的な方法で。

手と足を縛られていることを確認して、更に薄目のままで探る。
連れ戻した張本人は、ベッドに背をあずけて座っていた。

「眼、覚ましたんでしょ？」

質問の形を取ってはいたものの、断定だった。

誤魔化せるはずもないことは分かっていたが、声を出す気にはな
れない。

自分を殴った相手に、口をきく気になれるほど、酔狂でもなかつ
た。

「まったく。オレはボディガードなの。

あんたを守るのが仕事なの。

つゝわけで、逃げられると困るの！」

怒鳴るふうでもない口調は、常のそれより0・5ポイント分は荒

く作られている。

総合心理講座の資料の分類を任せたせいかもしれない。

「心配したよ、さすがに」

殊勝な言葉の主の顔は、だが背中に阻まれて見えない。

そういえば、二度と顔を見せるな、と言ったのは自分だった。

「分かかってやってんだろ」

何を分かっているというのだろう。

先にもまして断定口調のボディーガードに、感情制御がききにくくなる。

これだから、こいつと2人きりにならないようにしていたというのに、想定外だ。

ボディーガードなど、いらなかった。

前々から上にはそう伝えてきたし、つけられるたびに最新の科学議論を持ちかけたり室内アクセス権をハッキングで取り消したりして追い出してきた。

飄々と一ヶ月も居座っているのはこいつだけだ。

「あんた、捕まっちゃったら初黒星なんだよね」。

しかもあんた、捕まったら最後じゃん。

ぜってえ、拷問されたり自白剤使われたりするじゃん。

オレ、そんなの嫌だし」

それはお前の理屈であってこちらには何の関係もない。

常にそうしてきたように冷徹に告げようとして、二度と口をきかないと宣言したことを思い出す。

「あんたさ、ちょっとは余裕もちなよ」

一瞬。耳を疑った。

この自分に、そんなことを言ってくる相手がいることが、信じられない。

「明日が来るの、ワクワクしたことない？」

ギシ、と。安物のベッドが軋んだ音を立てる。

「何が起きるんだろうってさ、楽しくなったこととか」

アンタ、そういうの足りてないよね。

断定口調で言って、ボディーガードは笑った。

いっそ、殴りつけてやりたいと思う。

そうすれば、少しは楽になるだろうか。

ならないだろう、と考えて眼を閉じる。

「ま、オレはボディーガードだから。守るけどさ」

ガラでもないことしちゃったなあ、とぼやく声が遠く聞こえる。

本当にコレがS級ボディーガードなのか、と疑いたくなるほど緊張感の無い声が、部屋に響く。縄を解け、といおうとして、面倒になったのでやめた。

どうせ、眼が覚めたらラボに戻されているのだろうし。

「オヤスミ。博士。また明日」

R i g h t .

明日に見えるは闇ばかり

さういつて尻尾を巻いたと云うのに
わたくしは囚われてしまったのです

それはヒカリの檻でした
それはヒカリの澱でした

四方八方から睨まれて
身動き一つできないのです

言葉ばかりは優しいのです
未だ終わっていないでせう
そればかりが響くのです

それでいて
嗚呼 それでいて

生まれたての嬰兒にするやうに
微笑みさえも交えながら
ヒカリはわたくしを見透かして

今日を昨日をその前を
知った顔で云うのです
未だ終わっていないでせうと
わたくしの顔で云うのです

前を後ろを右を左を

上を下を内を外を

万華鏡のやうにきらきらと
わたくしがめぐっているのです

なんて絶望的な視界でせう
びいどろ硝子を覗いたように
幾重にわたくしがあるのです
その喧しいことと云つたら！
ヒカリの澱はよどむばかり
ヒカリの檻は歪むばかり

昨日のお道化もそのまた前も
悔ひた事実も嫌つたものも
このささやかな憐憫でさえ
すべてが露わにされてしまつて
どうして生きていけるでせう
どうして息ができるでせう

それだというのに

嗚呼

わたくしは息を止めないのです
はじめてしまつた以上
続けてゐくしかないのです

檻の向かうのわたくしに
そつと手を伸ばしてみました
澱の内のわたくしは
そつと手を締めました

奇異なことはなにひとつ
ここにはなかったのです
ただヒカリがあるだけで
ただヒカリがあるだけで！

未だ終わつていないでせう
ヒカリはやはり云うのです
わたくしの外で云うのです

闇一つない澱のなか
逃げ場のひとつも呉れないのです
残酷なまでに優しいかいなで
わたくしを放して呉れないのです

嗚呼なんてことでせう
わたくしはヒカリなど要らないといふのに
檻のなかに居るのです
澱のなかにいるのです

それはまるで万華鏡のやうに
それはまるで万華鏡のやうに！
わたくしの外に在るのです

ですからわたくしは諦めました
だつてヒカリが云うのですから
未だ終わつていないでせうと
さういつて放さないのですから
ですからわたくしも諦めました

明日はおそらく明るいのでせう
暗いのはわたくしの内だけで
明日はヒカリにあふれるのでせう
わたくしから闇があふれても

ですからわたくしも諦めました
わたくしはもう 諦めました
ヒカリは確かに在るのですから
わたくしの外に在るのですから

これから、1秒後でも、明日までも、100年後までも、生きてる限りさびしいのは消えないんだろう。

さびしいから、彼らに寄り添いたいのか、彼らに寄り添っていられるのが幸せで、さびしくなるのか。

両方だとして。

結局、

誰かのためになんて理由で生きていく気にはなれないんだろう。

私は。

今日も明日も明後日も、100年後も、彼らが笑っていられたらいいと勝手に思っ

そのためにできることを勝手に考えて勝手にやってみてるんだろう。

それで、それは結局。

とんでもなく浅くて足りないんだろう。

田中希美『月灯の路』

殺してやろうと思った

気に入らないヤツは全員

殺して殺して殺しつづけてやろう

そしたら、楽になれるんじゃないかと思った

でもな、逆なんだ

殺しても殺しても、気に入らないヤツは現れる

それじゃ、意味ねえじゃん

未成年がまた人殺しました
そりや大変ですね。動機は？

へー、かわいそーに

でも罪は罪ですから。法の裁きを受けさせないと
法は彼らに甘すぎますね

しらねえヤツらがしたり顔で言うんだぜ、きっと

そんで終わり。ジ、エンドだ

オレは、幸せになりたいんだ

そんな苦しい世界はゴメンだね

堂島良悟『ジーク・フロイドの終わらない旅』

目の前にあるその事実を受け入れましょう

受けとめるのはあなたなのですから

喜ぶも哀しむも怒るも嘆くも愛するも

あなたの権利であり

おそらくは義務であるのですから

K・M・Alt『自由論』

0 , 1 , 1 , 2 , 3 , 5 , 8 , 13 , 21 ,

3 4 , 5 5 , 8 9 , 1 4 4 , 2 3 3 , 3 7 7 ……

John Smith『フィボナッチ数列序論』

万の命をあなたに

高梨東夜『言祝ぐは佳酒』

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky:
So was it when my life began,
So is it when I am a man,
So be it when I shall grow old,
Or let me die!
The child is father of the Man:
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural
piety.

William Wordsworth 『A Rainbow
- Poems』

我々は、思想や、感情や、願望、さらには官能的感觉さえも、自分自身のものと主観的に感じながら持つことができるということ、しかし我々がこれらの思想や感情を経験しているとしても、それは外部から与えられたもので、根本的に我々と無縁であり、我々が考えたり感じたりしているものではないということである。

Erich Fromm 『自由からの逃走』

今日の空は、秋には珍しいほど青かった。
だといふのに、ぱらぱらと。馬車路の埃を払ふかのように雨の
降る。

「狐の嫁入り」

きみさまがぼつりとおつしやつた。

袴姿を真つ先に洋装に為さつたきみさまが、かういうことをお
つしやるとは。

迷信めいたものを何よりお嫌いだと伺つてゐたから、なんだか
変な気持ちだつた。

「天にも土にも、遠く忘れられて」

きりりとしたお声に、私は首を傾げる。

紅い林檎のやうな唇で、きみさまは涼やかにお笑いになつた。
息をのむやうに美しかつた。

「まるでわたくしたちのやう」

香河紅葉『日の照りながら雨の降る』

浪の音がひときは聞えた

中原中也『心象―中原中也詩集―』

d i c h o t o m y

「世界のすべてを、毒と薬に分けてみたいわ」

レイディ・グロウが言った。

特に観光地というわけでもない町のはずれの小さなホテルのベッドの上で。

たたき起こされたばかりのダンディ・ギャギは、目を白黒させた。

時計はまだ、朝を指してはいない。

レイディ・グロウはいつもそうだ。

思いつきで動く。それもとびつきりワガママに。

つきあわされるダンディ・ギャギはたまったものではなかったけれど、もう慣れっこになっていた。あきらめたともいう。

だから今夜も、何も言わずに布団にもう一度もぐり込もうとして、そうしてレイディ・グロウにベッドから蹴り落とされた。

「まずは、そう」

何事も無かったかのような涼やかな顔でレイディ・グロウが呟くのを、ダンディ・ギャギはぼんやりとした頭で見つめる。

レイディ・グロウは綺麗だ。一流の庭師が温室で育てた薔薇にたまった朝露のきらめきも、彼女の瞳の輝きにはかなわない。もっとも、レイディ・グロウの瞳が輝いて、ダンディ・ギャギがやつかないことに巻き込まれなかった試しはないのだけれど。

「明日は？」

毒かしら。薬かしら。

いたずらっけ満載の微笑みを浮かべるレイディ・グロウに、ダン
ディ・ギャギは途方に暮れた。

毒ってなんだっけ、薬ってなんだっけ。

そもそも明日ってなんだっけ。

一応考えてみたものの、頭がこんがりそうになってため息を
ひとつ。

レイディ・グロウがあきらめて、ベッドに戻らせてくれたらしい
のに。

ちよっと期待してみたものの、きらきら光る瞳にあきらめた。

うん。答えるまで無理だ。

「ねえ。ギャギは、どっちだと思う？」

につこりと笑う薔薇色の頬をちよっと恨めしく思いながら、ダン
ディ・ギャギはレイディ・グロウの金色の巻き毛に手をやった。

「薬だったらいいと思うよ」

君のその、突拍子も無い思考回路を直してくれるような、とは、
賢明なダンディ・ギャギは言わなかった。代わりに、そうしたら、
ずっと一緒にいられるかもしれない、と笑ってみた。

N o w h e r e .

理想郷を探していた。

もうずっと、長いあいだ。

誰もが笑っている世界を、ずっとずっと探していた。

誰もが笑っていられて、しあわせな世界を、探しつづけていた。

その為に、おどけてみせたこともあった。

長くは続かなかったけど。

めでたしを探していた。

もうずっと、長いあいだ。

めでたしで終わった物語が、永遠につづく世界を探していた。

めでたしめでたしの先は、しあわせしかない世界を、探し続けていた。

その為に、何ができたんだろう。

大団団はいつだって、長くは続かなかった。

理想郷を探していた。

めでたしを探していた。

誰もが普通にしあわせで、笑っている世界を。

誰もが生まれたように、生きていける世界を。

ずっとずっと探していた。

そこにたどり着くための、正しい路を探していた。

誰もが普通にしあわせで、笑っている世界ならば。

僕がいても赦されるだろうか、と。

ずっとずっと思っていた。

消えた方が世界のためだと、何度も何度も言われたけれど。

消えた方が世界のためだと、何度も何度も思ったけれど。
消えることなどできなかった。

泉から汲んだばかりの水さえこぼしてしまう、
役立たずの手のひらに、何度も悪態をつきながら。
何かないかと思っていた。

そこに言葉があった。

そこに文字があった。

僕は読み方を覚え、書き方を、計算を覚えた。

読みはじめたことに意味はなかった。

ただ、読まずにはいられなかった。

書きはじめたことに意味はなかった。

ただ、書かずにはいられなかった。

読みながら、書きながら、気づいていた。

理想郷なんてどこにもない。

めでたしはほんの一瞬。

そんなことも知らなかった。

そんな僕だ。

そんな、僕だ。

でも、それが僕だ。

理想郷はどこにもない。

めでたしはほんの一瞬。

僕はどうしようもなく僕のまま、この場所で立ちすくんでいる。
ずっとそうしているのだろう、となんとなく思っていた。

それが、今日。

強い風が吹いて、道ばたの樹々に咲いていた花が散った。
薄紅色の花びらが、ざああつと一面に舞っていた。

僕は、美しいと思った。

これを伝えたいと思った。

伝えずにはいられなかった。

どうしようもない僕だ。

でもここに立っている。

理想郷じゃないけれど、ここに立っている。

めでたしはほんの一瞬だけど、でも心は僕のものだ。

その心で、僕は思う。

世界について語るなんて、おこがましいことなのだとしても。

今この一瞬の花吹雪がどれほど美しかったか知ってる。

その中にいられたことは、普通にしあわせだと思う。

だから。

僕はここで宣言しよう。

この一瞬を積み重ねて、生きていってもいいだろうか。
生きて、いけるのだろうか。

そんな言葉じゃなくて。

後戻りできないことは、もう知ってる

ここでやめることなんてできないことも。

だからしかたがない、なんて言葉でもなくて。

生きられるところまで生きて

行けるところまで、行って

いつか、どこかで。

ちゃんと、背筋を伸ばして。

あの花のように、笑っていられる自分に、なりたいと思う。

その為に、今ここからはじめよう。

Epilogue .

『その為に、今ここからはじめよう』

具体性がない独白に苦笑しながら、最後の一文を読み終えた。

内ポケットから取り出したミントガムを口に放り込んで、なんとなく空を見上げる。

青い。

平凡なサラリーマンの感想なんて、そんなものだ。

膝の上で開いたまんまのノートの中身ほど繊細なわけがないし、そうであつてはやっていけないのではないかとも思う。

奥歯で噛みつぶしたガムの、爽やかな香りが鼻につく。

ニコチンをキシリトールに切り替えて数ヶ月。

まだ慣れないが、手持ちぶさたでもない。

禁煙をはじめたのは、喫煙室が会社になかったからだ。ただでさえ仕事を知らない新入社員。自分から肩身の狭い思いをするほど、煙草に心酔してはいなかった。

代わりに噛み始めたガムが癖になって、こんな休日にもまで持ち歩いてしまうあたり、コストパフォーマンスはどっこいどっこいといったところだが、少なくとも周りの視線は気にしなくてすむ。

くちやくちやとガムを噛みながら、苦笑した。

日曜とはいえ、昼間っから公園のベンチで暇そうにノートをめくって、何が周りの視線だ。

せめて喫茶店にでも行くんだったと内省しつつ、もう一度ぱらぱらとノートをめくる。

なんの変哲もない大学ノートだ。

存在自体、6年ほど忘れていた。

思いだしたのはついこの間、といってももう遠くかすんだ気がする3月。

内定をもらった勤務先が県外だったから、引っ越しをすることになった。その少し前のことだ。

押入れにつめこみっぱなしだった、段ボール箱をあけた。

幼稚園、小学校、中学校、高校、いったいいつから取つてあるんだかよく分からない代物がわんさか出てきていつそ笑った。

最初に手をつけたのは、一番上に乗っていた高校の頃の。

数I、英語、国語……捨てなかった理由が分からないほど大量のノートがたまっている。

引っ越しの期日は迫っているし、目の前のがらくたは膨大な量だしで少々焦っていた。

とにかく片っ端から紐でくくっていった、その時だ。

題名のないノートを見つけた。

中身がろくなもんじゃないことは想像がついた。

それでも開いてみたのは、好奇心がめんどくささに勝ったからだ。

一通り目を通して、馬鹿馬鹿しくなった。

単なる読書メモだった。

読んだ本の抜粋が主で、たまに読後の感想なのだろう、稚拙な文章が書き留められている。

今考えると頭痛がするくらい青臭く、偽善に満ちて、そして具体性もない。

だが。

何の変哲もない大学ノートを一冊まるごと埋め尽くしてなお、あまりあるほどの言葉を書きとめずにはいらなかったあの頃が、少し羨ましくなって。

俺は結局。

そのノートを捨てられないまま、こんな昼下がりに読み返してしまっただった。

誰もが一度はしたように、表紙を開いて。

f i n .

Epilogue・(後書き)

この冗長で散文めいた実験的な作品を、最後まで読んでくださってありがとうございます。

あなたがそこにいてくださることが嬉しいです。

作中にタイトルと著者名つきで引用した書籍の半数は実在します。どれも興味深い作品ですので機会があればご覧ください。

作品の形、内容、気に入った一言など、感想をいただけると、飛び上がって喜びます。

(執筆の活力になります)

どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5985g/>

心象 ~ A Book of Poetry ~

2010年10月8日14時41分発行